旭市における自給飼料の生産と利用の拡大の取組

～コントラクターが活躍する自給飼料生産～

１　課題の目的

海匝地域は大規模な畜産経営が多く、経営の持続性を担保するためには、適切な堆肥化処理の実践と堆肥流通先の確保が重要である。これまで堆肥流通先として、自給飼料畑に施用されてきたが、個々の畜産経営の飼料生産基盤が弱体化しており、堆肥の利用が進んでいない。そのような中、自給飼料生産を行うコントラクターが今年度新たに設立された。

このコントラクターへの支援を通じて、自給飼料の生産と利用の拡大に取り組んだ。

２　課題の背景

（１）畜産では、家畜ふん堆肥の流通先の確保が課題であり、自給飼料生産への活用を図ってきたが、飼料生産基盤が弱体化しており、なかなか進んでいない。

（２）旭市では酪農･肉用牛農家が中心となり､すでに２つのコントラクターが設立され、自給飼料生産が拡大しているが、農地の確保が課題となっている。

（３）酪農家では、飼料費の低減のため自給飼料生産の意欲は高まっている。

３　普及活動の経過

（１）課題の共有による組織化

肉用牛農家では、規模拡大に伴い堆肥の流通先の確保が困難となっていた。また、酪農家では、規模拡大とともに飼料費低減のため自給飼料の生産に対する意欲が高まっていた。このことから、肉用牛農家と酪農家の２者を集め、コントラクター事業の既存事例や活用できる補助事業の紹介を行い、組織化に向けた検討を重ねた。

（２）生産計画の検討

検討を重ねた結果、酪農家と肉用牛農家による旭市で３つ目のコントラクターが設立され、補助事業を活用して機械の導入を行い、デントコーンの生産を行うこととなった。そこで、生産計画や作業料金等の検討、提案を行った。また、飼料生産が初めてという農家がいたことから、飼料生産に関する知識レベルの統一を図った。

（３）種苗会社との連携

飼料生産にあたり、適切な品種選定や具体的な作付体系を決定するため、種苗会社との連携を図った。また、生育状況や飼料分析結果などの情報を共有することで、効率的な活動が可能になった。

補助事業の要件となる耕作放棄地の解消

４　普及（調査）活動で得られた成果

（１）自給飼料の生産と利用の拡大

新たに設立されたコントラクターは、平成 30 年度からデントコーンの生産を開始した。種苗会社と生産計画や生育状況の情報共有を図ったことで、コントラクターの適期作業につながり、倒伏や刈り遅れはなく、デントコーン約 17ha の生産を行うことができた。生産したデントコーンは組合の酪農家に供給し、利用量の増加が可能となった。

（２）農地、牛ふん堆肥の有効利用

デントコーンを生産した農地は構成員の農家が所有又は借りている農地である。堆肥の有効利用につながったことから、未利用農地を活用した飼料生産の意欲が高まってきている。

（３）作業の効率化、単収向上に向けた検討

湿害による生育不良が見受けられた農地では、明渠や簡易暗渠の施工など湿害対策を実施した。本コントラクターでは、千葉市に農場を持つ組合員がその農場の周辺農地でデントコーンを生産しているため、拠点となる旭市と機械の回送など時間と労力がかかる。作付体系を工夫し、往復する回数を最小限に抑えたが、今後適期作業を逃さずに面積拡大をするためには、品種選定の見直しなどさらなる工夫が求められる。

５　問題点と今後の展開方向

海匝地域では５つのコントラクターがデントコーンや稲ＷＣＳ等を生産している。コントラクターの持続的な経営発展のためには、地域農業との連携、農地の確保、湿害対策など飼料作物栽培技術の向上､機械更新に備えた積立て､経営管理などが重要である。

今後も関係機関との連携を図り、継続して支援していく。

湿害を受けたデントコーン

デントコーンの収穫

（旭グループ　普及指導員　小池　広明）